アンソロジー

anthology

ねむ

合歓

Vol. 13

http://nemunokai.net/

2014 冬

目　次

着ぶくれて……石井宏幸……2
日差し……井上悦男……4
移りゆくもの……植田桂之……6
満月と春満月と春の雨
……梅田光憲……8
夏を病む……大戸　稔……10
春……尾形松子……12
古道……桜本滋子……14
蜻蛉……角南房子……16
紅葉舞ふ……高城登代……18
たをやかに……谷口利子……20
歩きながら……富阪宏己……22
夜神楽……鳥越　梵……24
寒……長尾京子……26
菊の宿……名木田純子……28
石見国……信里由美子……30
現場より……蓮岡健美……32
移ろひ……真木好子……34
心天……三宅　進……36
目覚めゆく……山下祐子……38
無常……與田武彦……40
あをぞら……米元ひとみ……42
山寺……渡辺牛二……44
編集後記……渡辺牛二……46

着ぶくれて

石井宏幸

蛍火に濡れてをるなり闇の水

一粒の露の底にもある未来

公園は淋しき四角赤蜻蛉

陰といふ色に這ひ出で秋の蛇

つきぬけて天上の紺曼珠沙華　山口誓子

曼珠沙華を空を突き抜けてとまで詠んで、唐突に伸びてゆく花の性を顕わにし、地と空の立体構造を繋いで見せた。

先日、妻と小豆島を旅した。山がちな島は、谷に人々がかたまつて暮らし、その傍に墓所がかたまってある。土庄のとあるお彼岸の墓所では、遠近に祈りの姿があった。

辻てふ辻曼珠沙華島曼珠沙華　宏幸

稲刈つて日向無音へ入れ替はる

遠き日のごとくに昨日木の実落つ

銀杏散る耀よふ日々を追ふやうに

己が影内に閉ざして冬構

空といふ淋しさに触れ鎌鼬

著ぶくれて街の独りになりにゆく

日差し

井上悦男

新緑に朝の光の隔てなく

街中にゐて新緑の風の中

店先の小さき籠に盛る五月

捩花やおとぎの国の出入り口

今回もお世話になります。
柔らかな日差し、柔らかな影、ご近所からの柔らかい声そのような中を時間がゆっくりとゆっくりと過ぎて行きます。
家の中に居ても近所回りを歩いていても日々平穏な毎日です。
その様な中から一句を授かれば幸せです。

母の声大きくなつて夏休み

日傘てふ日陰ひとつを求めけり

日陰より日影とびだす夏帽子

雲一つピーと水泳指導員

暑気当たり傾くままの弥次郎兵衛

とんぼうの去るや何でもない小石

移りゆくもの

植田桂之

海峡に水脈引くフェリー風光る

麦秋や干拓平野海へ果つ

うす暗き土間の灯や梅雨続く

蛍火の映り水面と分かる闇

俳句を始めて十数年になりますが、感性の乏しさ、表現力のなさをひしひしと感じている昨今です。
でも句作は続けていきます。
これからもみなさんよろしくお願いいたします。

向日葵を山より高く写しけり

簗の簀に跳ねて光りて下り鮎

ロマンスの涸るることなし天の川

空へ蹴るサッカーボール雲の峰

糸蜻蛉水面飛ぶとき水の色

秋虹の中へすつぽり観覧車

満月と春満月と春の雨

梅田光憲

拍手を雄雄しく二つ初詣

携帯で名園の梅飛ばしけり

直角に進み卒業証書受く

石室の飛鳥の匂ふ春の雨

今号は、過日亡くなられた倉田紘文様を偲び、紘文選の中から十句を表題で。四、六、十句目は特選、七句目は二席、二、三、九句目は秀逸。初めての九句目も、最後に選していただいた五句目も、小生にとっては、忘れられない大切な思い出の句となりました。

うららかや僧の丸顔まる眼鏡

ちぎり絵の春満月もおぼろなる

春愁や明治の父の硯箱

新しき風と出会へる更衣

満月に濡れざるもののなかりけり

一水の音より萩の道となる

夏を病む

大戸稔

石楠花や著名高野の墓埋め
借景に城入れ園の茶摘みかな
玉島や闇に熟れゆく桃香る
名月に因む曲きく老の幸

お茶会の果てて寝待の駅に立つ
踊の輪入るももどかし八十路坂
合併の今も過疎なり夏を病む
夏逝くや「水辺の楽校」門扉閉づ
秋暑し蟹の甲羅に注ぐ酒
鬼ノ城や吉備野眼下に豊の秋

春

尾形松子

枕辺の水仙匂ふ読書かな

春や春吉備路をゆけば土にほふ

なの花や画風はメルヘンタッチなる

画用紙をはみ出してゐる春の色

退職後、俳句とスケッチを趣味として、自由に活動できる今をとても幸せに感じています。スケッチに出歩き句会には、なかなか出席できないので、近くの農村風景の残る田舎道の、ひとり吟行を楽しみ月一度の読売新聞への投句を心がけています。今回、富阪先生にお声がけいただき、「合歓」俳誌に発表できる機会を与えられましたことを、心から感謝申しあげます。

麦藁帽やさしさ満ちてちひろ展

梅雨晴間アオザイを着て異国の夜

軒々に掛玉葱のある小路

浜木綿の煙のごとき花の揺れ

火の番の近づいてくる旅の宿

野火はげし怒りんばうの婆のゐて

古道

桜本滋子

山笑ふ熊野古道を語り部と
みくまのの空晴れ渡り梅匂ふ
碑の文字の読めぬ四五基や春浅し
行幸の熊野もかくに春時雨

２００４年７月に世界遺産に登録される前の熊野古道など毎月１～２回、古道を歩くツアーに参加しました。熊野古道では、有間皇子の墓と歌碑、醤油発祥の地の湯浅、熊野三山など。そして吉野古道、柳生街道と歴史と信仰の山道を講師と共に歩いた思い出が再び蘇ってきます。

初音聞く熊野八鬼山なほ険し
春時雨尾鷲へ急な甃
鶯の声と吉野の山巡る
花散るや柳生滝坂いしだたみ
柳生みち茶山の中の石仏
山間の日を捉まへていぬふぐり

蜻蛉

角南房子

鶯の塒の里に暮らしけり

蒼々と暮れゆく山河栗の花

夏空の揺れて躓く段差かな

鷺草の光と風の水辺かな

鷺草が風に揺れている。
この花を絵葉書で見たのは高校生の頃だった。
園芸店にも見つからぬまま数年がすぎ、その後、ふと立ち寄った花屋で目に止まり苗を買って帰った。
あれから早、四十数年絶えることなく夏が来ると庭に涼しさを運んで来てくれる。

朝顔の色のぼりゆく四つ目垣

飛び魚の空切つてゆく速さかな

沖船の小さき帆掛けし晩夏かな

夕凪や家船の残る浦港

黄昏を引つ張る貨車や夏深し

先客に竿うばはれし蜻蛉かな

紅葉舞ふ

高城登代

尼の袈裟萩に触れつつ坂上る
美佐枝さん声に振り向く十三夜
臈たけて立待の月下手から
古刹抜け甘味処も紅葉なり

秋揚羽四枚羽緩く閉ぢにけり
差し伸ぶる老斑の手に紅葉舞ふ
待つ程に面火照りして初日の出
坂にある路線バス停日脚伸ぶ
アリーナのザ・タイガースよ春浅き
梅雨最中拾ひたる猫レンと呼ぶ

たをやかに

谷口利子

春暁や何を知らせに夢の母

卒業の子を連れて立つ墓前かな

飛花浴びて祝がるる如き一ト日かな

眼つむれば迫る残像春の滝

噎せかへるやうに牡丹の競ひけり

ときめきは微熱に似たり夕薄暑

更衣女はときに羽化夢む

咲き満ちてなほ静かなり蓮の花

道をしへ兄の遺愛の歳時記よ

木下闇渓流は音光らせて

歩きながら

富阪宏己

ひととせを病みて真夏を迎へたる

蟻といふ数の脅威の続きたる

青田へと振り込む雨のしきりなり

日盛りの生徒詰め込みたる校舎

歩きながら俳句が出来たらと思っている。
脳梗塞を患ってから、歩くことがままならない。
傍目には、思うままに歩いているかに見えるが、見えない努力が潜んでいる。
油断すると倒れる。
頭の中は必死だ。
俳句どころではない。
でも、俳句を詠みたいのだ。

バイオリンより精巧に兜虫

咲きのぼる朝顔空に遊びけり

秋暑なほ吐きつつ電車来りけり

新涼を開きて朝を歩みけり

水に映ゆとんぼの消えてゆく高さ

遥かより近づいてくる秋日傘

夜神楽

鳥越　梓

宿浴衣神話の里の夜神楽へ

炎天や真黒き鬼の力石

大雷雨高速道路一直線

特攻の文読む知覧原爆忌

友に蹤き霧の吊橋渡りけり

藩校の門のみ残り法師蝉

藪蘭や土塀傾ぎし武家屋敷

ゴンドラのガイド空しや霧の海

澄む水に耶馬渓を置き川流る

由布院はおしやれ温泉の町秋涼し

寒

長尾京子

大寒といふ穏やかな日のありて

焼鳥に長蛇の列や練供養

黙々と歩む一団夏遍路

網戸して風の道出来上がりけり

遠蛙夜汽車の音と合唱す

蒼々と放つ灯りの誘蛾灯

振り向けば洗濯物に暮早し

玻璃越しの雲の速さや十二月

色映す池黒くして冬の空

卓球部なべて小柄や寒稽古

平成二十一年十月酔芙蓉の会に入会させて頂き五年の歳月が流れました。一向に進歩がありませんが皆様のお蔭で何とか持ち堪えています。季語の種類・助詞の一文字で句が生き生きとして参ります。これからも精進あるのみです。御指導宜しくお願い申し上げます。

菊の宿

名木田純子

迫り来る野分の雲に塔すさる
秋の日の松葉一本づつに濃し
草の間に潜みし闇をつづれさせ
馬術部も時代祭の鎧武者

水面へと風折れ曲がり破れ蓮
茶の花や視線掻き分けたる先に
秋蝶の迷ひ込みたる昼の闇
一叢の芒に風は日となりぬ
思ひ出を香りに畳み菊の宿
火祭や佳境の闇に火色濃し

石見国（いはみのくに）

信里由美子

青芒大草原の音となる
蛇の衣をろちの国の風に揺れ
糸蜻蛉風と軽さを競ひをり
脱皮終へ草に美貌のきりぎりす

大夏野地球は蒼き呼吸せり
涼風の密度を変へてゆくリフト
銀河降る天は水音無き世界
星涼し空一枚の大星座
星座より詩片零れてながれ星
朝の来しこと未だ知らぬ月見草

現場より

蓮岡健美

煮凝の白き目玉を閉ぢにけり
ひたすらに畳みし心梅二月
解体の瓦礫濡らすや春の雪
波の音連れて鮑子売られけり

長閑けしや唄うて自賛百の父
棟梁の摘む練切藤の花
麗らかや絹糸ピンと弾く音
ふらここへ一人走ればみな走る
棟梁の口笛すがし梅雨晴間
現場より女左官の声涼し

移ろひ

真木好子

包丁を研ぐ肩先に春の雪

梁太く渡る古民家花に風

葉桜や枝垂れて風の吹き抜くる

籐椅子や終も一つの話題なる

昨年思い掛けず富阪先生からお誘いを頂き恐縮しながら不勉強な句での初参加、あの日から一年余り過ぎ去った今も作句は儘ならないが私の脳の活性化には最高の賜物かも知れない。

先ず季語の意味合いから取り組まなくてはと思う昨今である。

リリヤンの風細やかや夏暖簾

蔵街へ一歩踏み出す朝曇

襟立てて気取つてもみる極暑かな

歯磨きのリズム整ふ今朝の秋

葛触れて車窓叩くも旅ならで

寒林や濡れて大岩黒くあり

心天

三宅　進

夫婦して戯言交す心天
ゆつたりと波打つやうに稲穂かな
晩秋の景との別れ迫り来る
街の灯も淋しさ募る冬の暮

親子して着飾る姿七五三
凍土は転びやすさを秘めてをる
スイトピー切り花となり華やかに
花水木咲き初めて庭蘇る
高原の葉陰の中に夏わらび
謂れ知り改めて観る沙羅の花

目覚めゆく

山下祐子

春近し森抜けて風かはりをり

下萌やついここまでも今朝の試歩

沈丁花まだ咲かぬ香をほめられて

風あるかなしかに揺れて踊子草

雲厚く急旋回の蜥蜴かな

目覚めゆく街の閑けさ合歓の花

サーカスの来てこの町も夏らしく

遊船や昔語りも国なまり

岩清水烈しき音を瓶に詰め

あかあかと夏野の果ての入日かな

俳句を始めて変わった事。それは、自分のまわりを、立ち止まりよく見つめるようになった事。ほんの小さな物事にも、新鮮な驚きと感動を持ち、慈しむ。そんな風に日々を過していけたら。

無常

與田武彦

春寒し父と向き合ふ家族葬

八重ざくら静かに一人咲きにけり

蓮咲くや武士の名を残したり

縁台や子供に返る天の川

なつきゐし二匹の金魚姿なし

法師蝉札所に響く回向かな

風にのり今夜はおくの盆踊

法事終へ家で一息秋の蝉

萩の花友を送りし瀬戸の野辺

稲の花大事な人の星になり

今年は、春先から親族や隣組の身近な高齢の人がつぎつぎに亡くなり、秋には仕事上の恩人で日頃から元気であった私と同じ年の大事な人が突然に旅立ち、人の世の無常を感じております。

あをぞら

米元ひとみ

腰おろす石の温みも冬に入る

車より花束のごと七五三

幼子にしやがむ遊びや竜の玉

遠き日のめざめにいつも白障子

幼い頃の一年は、れんげや土筆摘み蛙釣りに始まった。石蹴りの端には柿の花が零れ、やまももを食べに木にも登った。青林檎一つ握って海で泳ぎ、稲刈りが終ると藁塚が秘密基地になった。そして気がつくと、かくれんぼの足元に瑠璃色の実をつける冬が来ていた。

初刷の厚みより色零れけり

初春へ門をひらきて美術館

成人の日や姿見にくもりなく

雑踏のうへのあをぞら初大師

倦む花の一つとてなき犬ふぐり

酒蔵のありて町あり雪解川

山寺

渡辺牛二

山寺に掃除機の音梅雨晴間

本堂の開け放たれて黴にほふ

寺男総じて無口汗ぬぐふ

本尊の円空仏似梅雨灯す

久米郡美咲町にある本山寺での十句です。
初めて訪れたのは、俳句のハの字も知らない、今から二十数年も前ですが、俳句を覚えてからは良い吟行地になっています。
三重塔が見事な、いつ行っても掃除が行き届いている、古いお寺です。

大方はなめくぢの物光る跡

尻尾だけ見れば小さし蛇逃ぐる

近づくと見せて遠くへ時鳥

夏蝶の行きつ戻りつ百度石

走り根に紅おどろしき梅雨茸

万緑の山寺鳥の声ばかり

編集後記

◆今号も多くの方に原稿をお寄せいただきました。心よりお礼申し上げます。

◆今号から新たな試みとして短信欄を設けてみましたが、いかがだったでしょうか。短すぎますか？皆様のご意見をお聞きし、次号に反映したいと思います。

◆八月の句会でのお話です。暑いし、句は出来ないし、疲れて早めに会場に入ろうとした時に先生とバッタリ、いきなり「タフガイ」と言われてしまいました。どうも私はしばらく見られていたらしいのです……。

◆さて、昼食にしようとすると、会場の食堂がお休みです。受付で聞くと三分ほど歩くとコンビニがあるとの事で、先生に「先に見てきます」と言い残して出かけましたが、案の定、コンビニは七分ほど歩いた大通りの向うでした。

◆暑いし、先生にはちょっと遠いか、と思いながら弁当を買い店を出ると、なんと、通りの向うににこやかに手を振る先生の姿がありました。

◆信号が変わり、颯爽と渡って来られる先生の姿は、暑さに参っている私なんかよりよっぽど元気そうに見えました。

◆その日の先生の句

タフガイとなりて日焼の友来る　　**宏己**

を私は迷わず頂きましたが、実は私もあの時の句を作っていますので、最後に書いておきます。

タフガイと呼ばれ噴き出す玉の汗

（牛二）

アンソロジー合歓　Vol.13

平成２６年１２月１日　発行
発　　行　合歓の会
発行責任者　富阪宏己
印　　刷　弘文社
　　岡山県津山市川崎 168

連　絡　先
〒 701-0304
岡山県都窪郡早島町早島 3991-144
富阪宏己方

次号締め切り
　平成２７年　４月３０日

原稿送付先
　〒 708-0015
　岡山県津山市神戸 719-7
　渡辺牛二
Email : info@nemunokai.net
Tel.　: 090-8710-7067

平成二十六年十二月一日発行　第十三号